

## 解 答

□

1 方策 2 帰省 3 快適

□

問一 イ 問二 ウ 問三 ア 問四 エ 問五 遺伝子  
問六 魚が少なくなった川に他の場所から魚を持ってきたこと。 問七 オ  
問八 アセスメント 問九 イ 問十 ア・ウ 問十一 エ  
問十二 片道切符だけを渡す〔こと〕 問十三 オ

□

問一 エ 問二 エ 問三 ウ 問四 ウ  
問五 皮算用 問六 オ 問七 悪者退治  
問八 オ 問九 ア 問十 イ 問十一 オ

## 解 説

□

1 「方策」とは、手段や方法のこと。  
2 「帰省」とは、ふるさとに帰ること。他に「省」を「セイ」と読む熟語には、「反省」などがあります。  
3 「快適」とは、気持ちがいい様子。「快」の訓読みは「こころよ（い）」。

□ 出典は、山崎充哲「いのちの川」。

問一 「身を乗り出す」は、体を前に出すこと。ここでは、「魚が減ったら鮎みたいに放流したらいいじゃないか」という意見に対し、放っておけず何か言わなければと感じた筆者の様子を表しています。

問二 後に「この人は魚に詳しくないからそういうことを言うんだ」とあるように、「魚が減ったら～放流したらい」というのは、よく事情を知らない「安易な」考えだといえます。

問三 あ 「昔は～上ることができた」と「いまは～上ろうとする。だけど、魚に力がないから上れない」という逆の内容をつないでいるので、逆接の接続語が入ります。い 「海からの遡上鮎は、全部堰をとっぱらっても、上って行かないんじゃないか」という説」があると述べた後で、「小柄になった鮎たちは、登戸のダムでほとんど止まっています」とその内容を認めています。う 空欄の前では「上流に上って大きくなる鮎は魚道を下れない」と述べ、後では「いちばん大きな鮎は上るだけ上らされて、下ることができないから、大鮎の遺伝子は残せない」とその結果を述べています。

問四 直後に「なぜいまその魚がいないのか」という理由をクリアにしなければ、結局死滅してしまうから」と理由が述べられています。さらに、「本来は持てきちゃいけない魚を放」すことによる「生態系の乱れが危惧され」とあります。つまり、魚にとってその川の環境が棲みやすいかということと、川にとってその魚が増えることに問題はないかということを考慮しなければならないのです。

問五 二つ前の段落に「かつて魚の遺伝子の問題が知られていなかった頃」は、魚の「個体には育った歴史がプログラムされている」ということがわかっておらず、別の場所から魚を持ってきたことがあったと述べられています。

問六 直前に述べられている、琵琶湖から多摩川に鮎を持ってきた例のような行為を指しています。

問七 傍線部の直前「耐性を持った雑草が生えてきて」というのが駄目になった理由です。除草剤に強い大豆を作ろうとしたら、その畠の雑草までが除草剤に強くなり、結局、畠の環境が悪くなってしまったのです。外来種を持ち込んだことにより、「河川や池や湖がボロボロに」なったのと同様の例として挙げられていることに注意しましょう。

問八 「正解はまだない状況にある」というのは、どのように放流を行うのが正しいのかが、まだわかっていないということです。「実際問題として先のことは読めない」とあるように、今はまだはっきりとした結果が出ていないため、正解を探っている状態なのです。

問九 直後に「こうやって少しづつ、魚と川への理解を共有していかなくては」とあるように、筆者は、「放流すればいいじゃないか氏」が筆者の話を十分に理解してくれたと感じています。

問十 まず、傍線部の直前に「あたたかい下水処理水が流される」とある。また、以前ダムがなかった頃には「あたたまるタイミングがない」ので「非常に水温が低い川」だったとあるので、ダムが造られたことによって変わったことが理由と考えられます。

問十一 傍線部の「このこと」は、直前に述べられている、多摩川の水温が温暖化したことを指しています。そして、それが問題なのではないかという筆者の考えが「的中」していたことが後に説明されています。「昔の鮎は9月に卵

を産んでいた」のに「12月に鮎たちが産卵をした」、そして「海で大きく育つ前に川に帰ってくることに」なり、「魚に力がないから上れない」というのがその内容です。

問十二 「とにかく上らせてあげる」とは、魚に川を上らせることしか考えていないということです。そのように、下りるときのことを考えない状況を、筆者は「鮎に片道切符だけ渡して」いるようなもので意味がないと述べています。

問十三 筆者は「ずっと言い続ける」ことで、国が魚道の整備に動き出してくれることを願っています。それは、魚道を整備することにより大型の鮎が育ち、結果的には鮎の数を増やすことにつながると考えているからなのです。

〔三〕 出典は、川端裕人「せちゃん一星を聴く人ー」。

問一 「悪者退治の報酬」として「ぼく」の妹のピアノを聴かせてほしいという「クボキ」と、「国連で表彰されたり、ノーベル賞をもらえるかも」しない、宇宙飛行士になって「火星に一番乗りを目指す」こともできるかもしれないと思像をふくらませる「やっちゃん」の姿を見て、「自分の望み」は何かを「自問」している場面に入れるのが適当です。

問二 その後も「頭の中では、『せっちあん、せっちあん』とその不思議な言葉がぐるぐる回っていた」とあるように、「ぼく」がその意味のわからない言葉に強く興味を持っていることがわかります。

問三 「頭の中では～ぼくたちはその企みをあばくヒーローへと大活躍することになるのだった」とあるように、「ぼく」たちはどんどん想像をふくらませて楽しんでいることに注目しましょう。

問四 直前にあるように、「ぼく」は普段から妹が「身内の注目を集めるヒロイン」であることに嫉妬しています。そして、「クボキ」まで「悪者退治の報酬」として妹のピアノを聴きたいと言うのでおもしろくないです。

問五 「捕らぬ狸の皮算用」は、まだ手に入らないうちから手に入ることを当てにして計画を立てることです。

問六 「特殊メガネ」「赤外線やエックス線」とあるように、「ぼく」たちは想像の中で、「敵」を「科学的」で「未来的」な存在だと考えています。

問七 「ぼく」たちが何のために「隠れ家」までつくっているのかを考えます。初めに隠れ家をつくった場面を読むと、「ぼくたちが悪者たちの尻尾を摑まなければならないのだ」とあります。それを表した「悪者退治」という言葉が適当です。

問八 今になって考えると、「なんのことない、パラボラアンテナ」と思えるものも、当時の「ぼく」たちにとっては「科学的」で夢のようなものでした。突如出現した「銀色のドーム」もまた、「銀色は未来の色であり、ドームは未来の構造物だった」とるように未来に行ったかのような、夢のようなものだったのです。

問九 「もはや～我慢できなくなった」や「どうしても自制できずへ中をのぞいた」などから、目の前のドームに「ぼく」たちが興奮している様子が読み取れます。もともとは悪者を退治する目的で監視していたはずなのに、「まだ遠い二十一世紀」がやってきたかのような夢のようなドームの出現に、それを忘れかけているのです。

問十 「彼はこの世のすべての恐怖をたった一人で背負って震えていた」とあるように、やっちゃんは人一倍気が小さいのに、「勘がいい」ために「最初に気づいてしまった」のです。

問十一 「ふり絞るように」から「クボキ」が恐怖を感じていることが読み取れます。それでも、これまでずっと見張ってきたんだ、今こそ真相が突き止められるときなんだ、と勇気をふり絞っているのです。